

山西省で迎えた終戦

兵庫県 和田 豊

私は大正十四（一九二五）年、兵庫県朝来市納座六番地で父・重夫、母・康子生の長男として生まれ、弟三人と祖父母の八人家庭で育ちました。祖父母が農業をやっており、父は銀行員でした。

私は地元の小学校卒業、兵庫県立八鹿養蚕学校を卒業後、農業技術員として農業組合に勤めていました。

当時は大東亜戦争も敗色濃くなり、徴兵検査も一年繰り上げとなり、満十九歳で検査があり甲種合格となりました。昭和十九（一九四四）年六月中旬でした。

入営は昭和十九年十一月十日、神奈川県川崎市溝口にある兵舎に入り一週間後に北支派遣軍第十四師団（将部隊）要員として横浜駅から出発しました。

北支那にある原隊から引率者として第二百大隊の阿部中尉と佐藤軍曹が来ておりました。戦闘帽に軍服着用、腰の帯剣は「サヤ」が竹で、軍靴の代わりに地下足袋で、小銃は一個分隊に九九式小銃か三八式小銃が、たった一丁だけ、飯盒は十五センチ長さの太い孟宗竹が雑のうに入っていました。

横浜から汽車輸送で下関まで行き、輸送船に乗船、出航、釜山港で下船、大陸独特の臭いに異郷を実感しました。

釜山から列車で北上、満州に入ると窓のヨロイ戸を「降ろせ！」と命ぜられました。敵地に乗り込んだので防諜上の措置だと思いました。

山海関を通過して北支に入り、万里の長城の巨大さに驚きながら山西省の山地を眺めながら大原の南にある平遙（へいよう）駅で下車、それから徒歩行軍で百二十キロも西にある我らの所属部隊、第十四師団第八十三旅団第二百大隊が駐屯する離石（リセキ）に向かいました。

寒気が厳しく、山越え谷越えが五日間も続き、落後する兵隊が半分も出て馬車に乗ってやっと大隊に到着しました。出迎えた大隊長高村勇中佐が

「初年兵を何ん度も迎えたが、こんな意気地のない初年兵は初めてだ！」と怒っていました。散々な入隊式でした。

第十四師団長は三浦三郎中将で、師団司令部は臨汾にありました。昭和十九年七月新設の師団です。第八十三旅団司令部は大隊より東方、六十キロの汾陽にありました。

大隊の駐屯する離石は山西省の西部に在り、街の西方は黄河が流れ、共産八路军軍の本拠地延安に接近しておりましたので、夜間演習の時ノロシが上がり、演習を中止して帰營したことがあります。

大隊の兵舎は元は小学校だったそうで、平屋建てオンドルとアンペラが敷いてあり、その上に薄いフトンを敷き毛布を被って寝ました。灯りはランプで、掃除は初年兵の仕事でした。

現地の気温は冬はマイナス二〇度にもなりません

が、毛の防寒具は無く、防寒襦袢を下着にして軍服を着用し、普通の外套ですごしました。

大陸の水は硬水で生水を飲むと必ず下痢をしますが、ここ離石（リセキ）の水はキレイで下痢はしませんでしたので助かりました。兵舎での食事は朝は蒸しパンが二個、昼と夕食は米飯で味噌汁に漬物でした。

一期の検閲までの三カ月間は例の通り昼夜を問わず猛訓練の連続でした。初年兵の腹は乞食腹といつていくら食べても食べるそばから腹が空いて、残飯を漁り、見つかってビンタを頂戴する。パターンはどこでも同様でした。

昭和二十年三月、検閲が終わり第四中隊に配属になりました。四月幹部候補生になりました。兵庫出身百八十人、埼玉県出身三十人、計二百十人が受験しましたが甲種十人、乙種十人が合格したのみで、私は乙種幹部候補生に合格しました。

五月汾陽に乙幹と下士候が教育に派遣されて教育を受けましたが、途中六月、汾陽と平遙の中間

地白石に百人が派遣され、その兵舎に泊まって五キロ間の道路警備の任につかされました。また、現地民を使って道路の補修をさせたりしました。

当時山西省では、蒋介石軍、共産軍、日本軍の三者がそれぞれ戦闘をするという混戦状態でした。

六月後半になると税金の代わりに小麦を供出させることになり、日本軍が一戸当り四〇斤、山西軍が五〇斤、共産軍は小麦でもなんでも良いから一八斤、合計一〇八斤を供出させていました。

八月になると、今まで毎日十時頃になると米軍機が二、三機、必ず空襲にきて、機銃掃射や爆弾を停車場に落としていましたが、十五日からは来なくなりしたので変だなあと感じていました。

また、ソ連軍が満州に侵入してきたので援軍として満州へ行くかもしれないとの噂が流れていました。

昭和二十年八月二十四日、大隊本部のある汾陽から六キロ離れた義安鎮の道路警備に派遣された班長以下九人が夜になっても帰ってこないのです。義安鎮に行きますと、宿営中の一個中隊がいて、

問い合わせますと、共産八路軍に襲われて班長は拉致され六人戦死、一人頭部破片創の重傷、二人生還ということでした。

なお詳細を尋ねますと、現地の道路は堤防のように高く、両側の繁っているコーリヤン畑に共産軍が隠れていて両側から襲われたそうです。班長は中国語が上手だったので拉致されたようで、私達が昭和二十一年四月帰国のため天津に向かつて出発するまで消息不明でした。

六人の戦死者の遺体が安置されている汾陽は、友軍の第九十九大隊本部のある街ですが、二十四日の夜半に八路軍が夜襲してきて激戦となりました。敵は城壁に穴をあけて侵入しようとしたがなかなか侵入できず、そのうち朝になると八路軍はラッパを吹いて引き上げていったそうです。すさまじい戦闘が三時間続きました。

ところが一個小隊が城壁の穴に取り残されていたので第九十九大隊長のA少佐が部下に命じて穴の入口に薪を積み上げ点火して全滅させたそう

した。

天津に到着したのが昭和二十一年五月四日で、港のある塘苦（ターク）で船を待ちました。五月

七日アメリカの上陸用舟艇（三、〇〇〇トン）に乗船しましたが山西省にいる頃、いろいろデマが飛び交い、アメリカに連れていかれて奴隷になってコキ使われるとか云われていました。

五月十一日博多に上陸、入浴、消毒で久し振りにさっぱりして日本食に祖国の温かさが身にしました。

負け戦で肩身が狭いから夜になってから家に帰るんだと言う戦友も多くおりましたが、私は昼に家に着くように汽車に乗りました。家には連絡せず突然帰ったものですから皆びっくりして無事をよるこんでくれました。祖父母はじめ両親、弟も皆変りなく元気だったのでよかったです。

家に帰ってすぐ当時の食糧増産の波にのって農業に従事しました。農地改革の嵐が吹いていましたが、我が家の一町五反の農地も、祖父が時代の

です。そのため少佐は八路軍から戦犯指名となりました。また日本軍の敗戦で共産軍の勢力が拡大し鉄道破壊等が各地で起きました。

昭和二十一年一月二十五日、中国共産軍と日本軍との間で停戦協定が成立しました。四月復員準備が始まり、天津に向け日本軍がそれぞれの駐屯地から鉄道のある街まで徒歩行軍しました。その引き上げる道路の両側には八路軍がズラリと並んで、A少佐がいまいいか探していましたので、医薬品を提供して無事通り抜けることが出来ました。

少佐は単身脱出を図り、拳銃一丁を持ち変装していましたが、上の方でトラックに警備兵をつけて二日前の夜、既に脱出したそうで、無事帰国したとのことです。

鉄道のある街に着き、無蓋貨車一両に一個中隊百五十人が乗ったので身動き出来ませんでした。携帯した糧秣を床に並べ、その上にアンペラを敷き人間が座る始末で大変でした。屋根代わりに各自持っている携帯天幕をつないで雨露をしのぎま

流れに先見の明があつて自作地にしてあつたので、取り上げられることはありませんでした。

昭和初期の小作争議の波を読んで、金が貯ると田畑を買うのをやめて山林を買つておりましたので、農地開放の波をかぶることもありませんでした。

戦後は、私は朝来町議会議員や農協理事等を努めさせてもらいました。山西の地に散つた戦友の霊のご冥福を祈つておりました。

ボタン一個が命拾い

—独混第一旅団河南省警備—

福島県 高橋 巧

喜多方市は町村合併で市になりましたが、私が生れたのは大正十一（一九二二）年で、当時は加納村と言う静かな農村の農家に生まれました。祖母と両親と兄と姉と弟の七人家族でしたが、私が六歳の時に母親が病気で亡くなりましたので、以後、祖母と父親に育てられました。父親は農業で、主として米を作りながら副業に馬車で荷物を運ぶ、現在なら運送業をしながら生計を立てていたようでした。

私は小学校を卒業すると、村の染物屋さんに奉公に出されました。染職の手伝いをしながら尋常小学校高等科に二年間通学させていただきました。卒業してからもその染物屋さんで働きました。染物屋の職人の技術、例えば新品反物の糊を抜く